

〈実践報告〉

## 教えるということを理解するために

松 山 明

### 1. はじめに

令和5年11月6日(月)の新聞記事が目にとまった。教職を目指すための授業を担当する私には、最近聞こえてくる教員志望者減少ニュースが多いなか、記事の内容にひきつけられた。記事は「教職敬遠なぜ」学生調査で浮かぶ理由という見出しで、次のような書き出しで始まる。

公立学校の教員採用試験の志願者が減り、学生が教職を敬遠するのはなぜか。その理由を学生本人に聞く調査が続いている。過酷な勤務実態を知り選ばなくなったり、教育実習の経験が影響したりする状況も浮かぶ。

一般財団法人「教育文化総合研究所」(東京都千代田区)所長の菊池栄治・早稲田大教授(教育社会学)が、学生へのインタビューをもとにした報告書を令和5年5月にまとめた。昨年10～12月、教員免許を取る予定ながら教職以外の道を選んだ国私立大の4年生21人に7大学8人の教員が聞いた。

「学級人数多すぎる」「教師に向いているのになと私自身も思うけれど、やっぱり日本では無理」。海外の大学院に進む私立大の女性は大学教員のインタビューに対し、そう話した。「諦めさせるほど劣悪な職場環境なのは『ちょっともったいなさすぎるよ、日本』って思うのが悔しい」教職断念のきっかけで目立つのは教育実習だ。金融機関に就職する国立大の男性は「1週間で体が動かず、絶対に自分には無理だと感じた」。21人のうち17人は「条件が整ったら教職についてついてみたい」と答えた。その「条件」として、国立大の男性は少人数学級の実現を挙げ、「(学級規模が)今の半分ぐらいじゃないと子どもを見られない」と述べた。菊池教授は言う。「教職は子どもと向き合い未来の社会をつむぐ仕事。教職を取り巻く環境を抜本的に改善しないと危機は深刻化するだろう」

教育社会学を専門とする佛教大の原清治教授、京都文教大の浅田瞳准教授、神戸松蔭女子学院大の長谷川誠准教授のグループ(代表・原教授)が調べたのは、「学校を取り巻く状況が厳しいと言われる理由について、学生はどう考えているか」と、「教育実習後の志望度の変化」だ。関西圏の私立4大学の2～3年生268人を対象に令和5年1～4月に調査を実施し、9月末の日本教師教育学会で発表した。教職が厳しい職と言われる理由としては、4大学のうち3大学で「労働時間が長い」「残業代が出ない、給料が安い」「部活動指導」が上位を占めた。他方、

教育学部があり、教職への進路が既定路線の1大学だけは「勤務が過酷だというのは社会が構築した偏見」が1位で35%だった。「ボランティアやインターンシップを経験する学生が多いため、『学校は言われるほどしんどくない』と感じていたり、教職を目指す強い意志を持っていたりすることが考えられる」と研究グループは分析する。

原教授は「学校が厳しいという見方は、教員養成を目的とした大学の学生には、それほど大きな影響を与えていない可能性があり、精緻な分析が必要だ」と指摘する。また、教育実習前後の志望度の変化を分析した結果、実習後に数値が落ちた学生の自由記述には、「大変さを知り、教師の仕事が良いとは思わなかった」「保護者対応が多く、やりたいことに対する時間が減ってしまう」「本当に仕事にしばられない時間がほしい」などの声もあった。

研究グループは「実習先の担当教員から学校現場の厳しさなどを見聞きする機会が多くなり、結果として教職回避の要因になっている可能性も否定できない」と分析している。

## 2. 令和6年度「美術科指導法Ⅰ」受講生の（美術科）教員に求める姿

本学の教職課程の科目履修が始まるのは2年生からである。令和6年度「美術科指導法Ⅰ」の履修生に「美術科指導法Ⅱ」の syllabus 作成のためのアンケートを実施した。アンケート項目は、教員の仕事に興味を持った時期、教師になりたいと思ったモデルになる先生、どのような美術科教員をめざすか、などを尋ねた。学生の教職に対する考えや思いは様々であるがモデルとなった先生との出来事などの記載がある。以下に紹介していく。

- ・高校の頃、美術の先生が楽しく熱心に授業をしている姿を見て楽しそうだったと思った。
- ・進路の芸大に反対された時、親身になって担任が最後まで支えて味方になってくれた。
- ・授業の中で1人1人に合わせたレベルでアドバイスと対話をしてくれたのが素敵だった。
- ・祖母が家庭科の先生でぬいぐるみ作りを教えてもらった時、教えることに興味を持った。
- ・中3で美術部の先生に美術教師について聞いてから。姉が小学校の先生になる夢もある。
- ・中学生の頃に出会った美術教員と西洋美術史がきっかけ。色々と重なって目指している。
- ・中3の時、進路に悩む私に、担任の先生が私のやりたいことを後押ししてくれたこと。
- ・中学生の時、教師全員が面白くて熱心で学校に行くのが楽しかったです。自分も教師に。
- ・小5の時、体形のことではじめられていた私を親身に対応してくれた先生が憧れになる。
- ・中学の時、「学校の先生にむいてるよ」と言われたことがきっかけ。塾で講師して興味。
- ・美術部の顧問の先生から「美術の教師が向いているよ」と言われたことがきっかけ。
- ・高校の課題研究の授業で、生徒一人一人と向き合い一生懸命な教師を見たから。
- ・教員免許の取得が大学進学条件だったので、なんとなく取ってみたいと思った。
- ・高校の時に教師、担任、顧問や美術の先生など多くの先生に助けてもらったからです。
- ・大学2年生、作品制作の時にいろいろなことを教えてくれるからです。
- ・大学1年生、教職概論の授業で教師の歴史を学んで、教員の仕事に興味を持った。

- ・中学校で学校に行かない時期があった時、私の話を聞いてくれた担任教員が良かった。
- ・高校2年生の時、人に物事を教えるのが楽しいと思い、この仕事を目指すようになった。
- ・もともと、保育園の先生に園児の頃からほんのりあこがれていたのがきっかけです。
- ・中学生になって初めて美術の授業を受けて、それがすごく楽しかった事がきっかけです。
- ・地元が好きなので、地元でも働ける仕事が1つでも欲しかったので履修することにした。
- ・編入のタイミングで教職を履修。授業で教員の知識が増え教員をめざす気持ちが固まる。
- ・高校生の時、教員志望の同級生に心を救われた。私も人を支える人になれたらと思う。
- ・高校生の時、自分にとって支えになった人は家族以外で学校の先生の存在が大きかった。
- ・高校美術の授業が楽しくその先生に憧れたことがきっかけです。その憧れに近づきたい。
- ・中学生の頃、体育館シューズデッサンの見本が写真だと思ったら先生のデッサンだった。その絵に衝撃を受け、絵の世界にはまり、私も子ども達に絵の魅力を伝えたいと思った。
- ・専門学校に通っていた頃、美術関連の仕事について考え美術教師もいいなと感じたため。
- ・中学、高校で進路を決める時に苦労した。その時、色々な先生が助けて下さったこと。
- ・興味を持ったのは高校2年生。母校は美術、デザイン、工芸、テキスタイルなどの専門の先生がいて、指導している姿がカッコよかった。教壇に立つというのは覚悟がいる。
- ・高校生の頃、いじめ等に寄り添えるのは教員。教員となって子どもの支えになりたいと思った。美術の制作や鑑賞の良さや楽しさを生徒に教えたいと思ったから。

「美術科指導法Ⅰ」の履修生の97%がアンケートに回答した。教員という仕事に興味を持った理由は、履修生が小、中、高の時代に生徒をしっかりと受け止め、心に残る教員に多く出会っていることが理解できた。本校の学生一人一人が抱いた教職への関心と意欲をどのように現実の形にしていくかが「美術科指導法」の授業目的でもある。美術の指導だけでなく進路の相談相手など教員としての仕事の多様さも表記されている。次の項目では教師を目指したいと思った先生の魅力について整理した。

### 3. 「美術科指導法Ⅰ」の授業まとめで実施した、「美術科指導法Ⅱ」の syllabus 作成アンケート項目2で「教師になりたいと思ったモデルになる先生はどんな魅力を持った人ですか」と尋ねた。児童、生徒、学生時代の教員の必要な資質などが記載されている。理想の教員像はどのような先生だろうか。学生の心に残っている先生像を見ていきたい。

- ・担任が芸大の進学を支えてくれた。生徒目線で物事を見る先生。いつも走っていた印象。
- ・生徒それぞれにあったアドバイスをする生徒思いの先生。笑顔を絶やさない素敵な先生。
- ・優しいけど信念のある先生。ちゃんと生徒を見てくれてその人にあった指導をする先生。
- ・物理の先生。苦手な私に面白く教えてくれた。苦手な教科を少し好きにしてくれた先生。
- ・生徒を一人の人間として扱ってくれる先生。

- ・スカート丈にはうるさいが、進路については親身になってくれる母親のような先生。
- ・すごく優しくしてフワフワしていて話しかけやすい人だった。将来の相談をしやすかった。
- ・高校3年古典の先生。悩みのある生徒に念入りに相談に乗り、一人一人を見る姿が良い。
- ・生徒との距離が良い意味で近かった先生。明るくて社交的でポップな先生です。
- ・先生と生徒という立場を守りつつ話を聞いてくれたり、アドバイスしてくれる先生。
- ・誰よりも教育熱心で生徒に寄り添おうとする心が伝わる人。生徒に慕われる魅力がある。
- ・心が強く放任主義な人でしたが、生徒のことをしっかりと見て全力で助けてくれる人。
- ・高校の先生で声が大きくめっちゃくちゃ喋るのにかまないし、話がわかりやすい先生。
- ・生徒思いで、必要以上に干渉しない、必要な時に頼りになる先生。
- ・共感能力が高くて優しい生徒思いの先生です。
- ・教師として叱る時は叱って、ふざける時はふざけるメリハリのある先生。
- ・わからない時は優しく教えてくれる先生。全員を平等に見てくれる先生。
- ・高校時代の担任の先生。自分の考えや意見をギャグっぽいものも交えて話す先生。
- ・出来なかった事は、次にどうすれば出来るかを一緒に考えてくれた先生。
- ・話が上手でものごとを順序だてて話す先生。生活指導面でも頼りがいのある先生。
- ・生徒によりそってくれる先生で、私の意志を尊重してくれる先生でした。
- ・生徒愛があり、自分の教える教科愛をたくさん感じる先生です。
- ・デザインの良いところを褒めた上で、構造的にフィードバックしてくれる先生。
- ・自分で答えを出せるよう、的確なアドバイスをしてくれる先生。
- ・生徒との距離の取り方がとても上手な先生でした。
- ・中学校の担任の先生。やんちゃな生徒のエネルギーを学校に向くように指導してくれた。
- ・私のつらいことや苦しいことを明確にし、一緒に問題解決に取り組んでくれた先生。
- ・基本的には放任ですが、生徒が困っている時に助けてくれる良い距離感が魅力でした。
- ・こうしたら面白くなるのではといった想像力を膨らませるアドバイスをくれる先生。
- ・個人の感性、作品、世界観を否定しない、謙虚な人物。
- ・間の取り方や話のふり方、生徒との距離感、人を引き付ける楽しい授業のできる先生。

以上のように、教員という仕事に興味を持つようになったのは、自身が生徒として小学校、中学校、高等学校の時代に出会った、多くの先生の優しさや気配り、生徒に寄り添う姿などが記憶に残る先生となっている。2年次生から学んだ教職課程での授業を生かし、4年次生での教育実習は、生徒と共に作り上げる授業や学級指導、生徒指導など実際に子どもたちが学ぶ学校現場で実施される。教職課程の最後の取り組みとして実施される教育実習で学生の意識はどのように変化していくだろう。

#### 4. 令和5年度「教育実習I」事後指導アンケートによる教職に対する4年次生の意識変化

教育実習終了後の事後指導で「教育実習I」レポートを実施した。注目したい質問項目は6「教育実習の実施前後で変化したことはありますか。特に教職への意識はどのように変化しましたか。」である。実際に生徒に教えるということを経験し、教員という仕事に対する職業観はいろいろと揺れ動いている。教職に対する積極的な意見や前向きな意見、そして、教職には否定的な意見などがある。所属学科と性別を表記している。

\*教職への意識が高まった、教職に対する積極的な意見（23名）

- ・私は教師になるつもりはなかったが、教育実習を終えてからはとてもやり甲斐を感じる良い仕事だと感じた。(工芸学科、男子)
- ・現代の中学生は想像よりもずっと大人でしっかりしており、教職は教えるだけでなく、生徒の心に寄り添う仕事であると考えようになりました。(デザイン学科、女子)
- ・教職は教育実習に行く前はとてもつらい、苦しいと聞いていたのですが、いざ実習に行ってみると教員の方や生徒たちも優しい生徒ばかりで苦勞よりも楽しかった印象が大きく、授業をするのがとても楽しいと思いました。(デザイン学科、女子)
- ・教師として生徒と関わることの大変さと楽しさ。充実したように見える背景にある人の努力など実際の教育現場はとても素晴らしいものと思った。(デザイン学科、女子)
- ・実習前まで今後の進路について迷いがあったが、実習後は将来的に自分なりの指導観を持った美術科の教員になりたいと思った。(デザイン学科、女子)
- ・教職課程での学びではわからないことについて、実際の現場での活動を通して学ぶことができました。大変な面も多かったですが、それ以上に生徒との関わりを通してやりがいを実感することができました。(デザイン学科、女子)
- ・教員になるつもりはなかったですが、「教員向いてるよ」「教員として一緒に働こうよ」といった先生方からの言葉や、生徒たちからの「授業が面白かった」という言葉をもらえて教員になってみたいと思いました。(デザイン学科、女子)
- ・教職を楽しんでいる先生方の姿に、世間的な辛いというイメージを覆されました。労働時間の長さはあるかと思いますが、それ以上に学校、教員という仕事に魅力があるのだと実感することが出来ました。(デザイン学科、女子)
- ・教育実習をして、改めて教職に対してあこがれが深まりました。また、美術教育への危機感も感じました。(デザイン学科、女子)
- ・増々教員になりたいと思いました。私が教えたことで、生徒の「出来る」に繋がるのがやっぱり嬉しいことだと改めて感じたので。(デザイン学科、女子)
- ・教育実習にいく前からとても楽しみにしていて、終えた後で楽しかったと思えた。大変なこともたくさんあると感じたが、教職を目指したいと思う。(美術学科、男子)
- ・教職への意識は高くなりました。高校の教員志望でしたが、中学校の先生が肌に合うと自

覚し、教員のやりがいが高く感じられた教育実習でした。(美術学科、女子)

- ・以前より、知らない人と話すことへの抵抗感が少なくなり、何か出来事が起こった時に柔軟に動けるようになったことを実感しています。教職だけでなく、日常生活にも良い影響があったことで教育実習に行って良かったと思えました。(美術学科、女子)
- ・教職への意識はあまり変わっていないが、教職への理解は深まった。自分が教職に向いているという見解が、私以外からも評価として得られた事が良かった。(美術学科、女子)
- ・教師になるつもりだったが、実習を終えてより教職の意識が高まった。(美術学科、女子)
- ・教育に携わるのもいいなと思えるようになりました。ただ、中学校での経験や思い出はその生徒の将来に大きく作用するので、自分自身をもっと成長しないといけないと感じました。(美術学科、女子)
- ・教育実習前は教員なんて絶対にならない、子どもは嫌いと思っていましたが、教育実習後は、教員は素敵な職業だなと前向きにとらえることが出来ました。(美術学科、男子)
- ・教員で働くことを楽しみに思う気持ちはなくなったが覚悟は出来た。(美術学科・女子)
- ・教職に対して前向きな気持ちが生まれた。指導の楽しさを知った。生徒の反応が面白く刺激的だった。(美術学科、女子)
- ・とても魅力的な職業だと思えました。初めの頃よりとても興味深い職業になりました。生徒との関わりなどでたくさん学ぶことができました。相手にどうやって伝えるのが良いか。何を伝えたいと相手か思っているのか意識するようになりました。度胸も付きました。とても良い期間だったと心から感じます。(美術学科、女子)
- ・教員の業務面、精神面、授業面などさまざまな面での大変さに気付いた。「先生の笑顔は最高でした！」などといった、素敵な言葉を生徒からもらった時に教職に就きたい気持ちが深まった。(美術学科、女子)
- ・教員を目指す気持ちがさらに大きくなったと思う。生徒の成長を間近で見ることが出来てうれしかった。(美術学科、男子)
- ・学校は「ブラックだ」と世間的によく言われていて、実習が始まる前にも両親に心配されていたのですがいざ実習が始まると、思ったよりブラックではなかったです。チーム担任制が採用されている学校ということもあって先生同士の支え合いを感じる事が出来て、思っていたより教職っていいなと思えました。(美術学科、女子)

\*教職に対する前向きな意見 (9名)

- ・学校は生徒を厳しく律する場所というイメージから、生徒に寄り添い守る場所というイメージに変化した。それにあたって教員も生徒を厳しく指導する認識から、出来るだけ生徒を肯定し見守るという認識に変化した。(デザイン学科、女子)
- ・実習が始まる前まで、前年度にお電話させていただいた時から近づくにつれ恐怖心がありました。始まるまでは長く感じる3週間でしたが、終わってみれば短く早く感じる3週間

でした。(デザイン学科、女子)

- ・教員の仕事は苦勞することもたくさんあるけど、それだけやりがいはずごくある仕事だと改めて思った。生徒への接し方、授業の進め方など、現場でしか学べないものがあり、よい経験をすることが出来ました。(デザイン学科、女子)
- ・人と関わることや大勢の前で話すことが全く緊張しなくなった。教職の仕事は辛いことばかりでなく、やりがいもあると感じた。(デザイン学科、男子)
- ・特別支援教育の勉強もしたいと思った。(デザイン学科、女子)
- ・教員ヘリスベクトする気持ちが大きくなった(デザイン学科、女子)
- ・若さの大切さを知ったので、若いうちに教員になりたいと感じた。(美術学科、男子)
- ・今まで人の前で発表や発言をすることが苦手だったのですが、実習を行い教える立場として当たりまえに、前に出て説明したり発言するので、今では自信をもって発言することができるようになったのではないかと感じています。(デザイン学科、女子)
- ・教員の仕事は大変だというイメージは変わらないが、やりがいというものを大きく感じる事が出来た。生徒の姿を近くで見つめ、生徒のために活動することは思っていたよりも楽しい印象になり、マイナスイメージが覆されました。教職への意識も以前よりもプラスな方向に変化しました。(美術学科、女子)

\*教職に対する否定的な意見(6名)

- ・想像以上に忙しく仕事がハードだったので、教職への意識は薄れた。(工芸学科、女子)
- ・もともと教職にはいつかは関わりたいと思っていましたが、関わりたくないと思いました。(デザイン学科、女子)
- ・教師に少しなろうと思っていたが、自分には向いていないと感じ違う仕事に就こうと思いました。(デザイン学科、男子)
- ・公立の中学校、高校の常勤にはならないと考えるようになりました。正直、実習先での一部の先生方が、見ていると苦しくなるくらい過酷な環境だった。(美術学科、男子)
- ・生徒と関わることは得意で上手くできたが、教師としての仕事(教えること、模範とされる人間)には向いていないと感じた。(美術学科、男子)
- ・土曜日も午前中に授業がある学校だったので、午後も部活動、生徒同士の喧嘩の対応をしている教師を見て、常勤講師は休みがないと知った。非常勤講師の仕事量で担任を持たずに美術を教えられるなら教師も魅力的に感じる。(美術学科、女子)

以上、令和5(2023)年度の教育実習生の教育実習後の事後指導アンケートを紹介した。記入者38名のうち教職に対して肯定的な意見は32名(84.2%)、否定的な意見は6名(15.7%)である。学生一人一人の教職に対する意欲を高め、楽しくわかりやすい美術の授業がさらに創造できるよう、授業内容の点検と改善に取り組んでいきたい。

## 5. 授業改善の視点としての主体的・対話的で深い学び

学習指導要領解説の中で、今後予想される変化の激しい社会において、子供たちが未来社会を切り拓くために知識・理解の質を高め育成を目指す資質・能力については、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、ア 何を理解しているか、何ができるか 生きて働く「知識・技能」の習得。イ 理解していること・できることをどう使うか 未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成。ウのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養。の三つの柱に整理するとともに、各教科等の目標や内容についても、この三つの柱に基づく再整理を図っている。また、指導計画の作成に当たっては、「題材などの内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力に向けて。生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、造形的な見方・考え方を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ること。」と示している。

では「主体的・対話的で深い学びの実現を図る」とはどんな授業を行うことなのか。という質問に「美術資料」教師用資料では次のように答えている。

生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を目指すための授業改善を行う視点が、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）である。中央教育審議会答申では、「主体的な学び」は学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が出来ているか。

「対話的な学び」は子供同士の協働、教職員や地域との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

「深い学び」は習得・活用・探求という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。と示している。

## 6. 主体的・対話的で深い学びの実現

上智大学総合人間科学部の奈須正裕教授は、著書の「資質・能力」と学びのメカニズム・第5章 主体的・対話的で深い学びの実現で、アクティブラーニングという言葉 1. 始まりは大学教育改革だったと著している。

「アクティブ・ラーニング」という言葉は、2012年8月28日の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」における以下のような記述を契機と

して、広く用いられるようになった。「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生から見て受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、論理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる」残念ながら、我が国の大学教育では一斉講義型の授業が主流でした。しかし、それでは「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材」を育成することはできません。ここから教育方法の刷新が求められ、文中に例示されているような多様な方法が推奨されたのですが、それらを集約的に表現した言葉がアクティブ・ラーニングなのです。

## 7. 「美術科指導法Ⅰ」における能動的学修への改善

「美術科指導法Ⅰ」では美術科教育に関する基礎知識の学びと実践研究をととして中学校高等学校の美術科指導方法の理解を深めるとともに作品制作により評価の場面を考慮した学習指導案の作成や作品相互鑑賞会などを活用した主体的・対話的で深い学びを取り入れた授業が創造できる資質の向上をめざしている。授業方針と授業概要は次のとおりである。

- ・学習指導要領をよく理解し、適切な指導・評価計画が作成できる資質を習得する。
- ・美術表現の知識・技能や鑑賞指導の研究を深めるための授業研究活動を推進する。
- ・美術史の専門性を高めるために国内外の代表的な美術作品や文化遺産の知識を修得する。
- ・ICTを活用した「わかりやすく楽しい美術」の授業の導入と展開の授業研究を行う。
- ・作品相互鑑賞会を通じて、自分の作品への思いと他者の作品制作についての理解を深める。

美術科指導はA表現（絵画、彫刻、デザイン、工芸）とB鑑賞の5領域である。教育実習校は出身中学校、高等学校の美術科教諭の指導のもと、美術の授業を行うことになる。

令和5年度教育実習生46名の実習校での授業時間数は1～10時間は26名、11～20時間は14名、21～30時間は3名、31～40時間は3名であり、授業の領域はまちまちである。

本学では美術科指導法（Ⅰ～Ⅳ）と4年次生の教育実習Ⅰの授業で美術科の学習指導案を5回作成することによって授業計画を立案して導入部分だけの模擬授業を体験させているがまだまだ深い授業研究には至っていないため、授業展開の中で能動的学修（アクティブ・ラーニング）を取り入れるよう指導助言するとともにシラバスの改善を順次進めている。

令和6年度前期の「美術科指導法Ⅰ」では作品相互鑑賞会において各個人が作成した作品についての創造性と工夫点などの制作意図の説明を最初に行う。そして、その後に全員の作品を鑑賞する。鑑賞後に他者の作品の良さや気づきを鑑賞シートに記入するとともに、投票す

る付箋にも記入して作品を通した意見交流を進めることによって、多様な表現のあり方の気付きと発見ができるようになった。以下の写真はその授業風景の一部である。



作品の創造性について説明



作品の鑑賞と解説を聞く



作品鑑賞し味わい・投票

## 8. 美術科学習指導案を作成し美術を教えるということ

「教育実習Ⅰ」の事後指導アンケートで「後輩へアドバイスすること・実習で苦労したこと」の一番はやはり美術科学習指導案の作成です。実習生の後輩へのアドバイスのでは「指導案は事前に3つ程用意しておく。」「指導案を集めておくこと。導入のためのパワーポイントを作成する。」「美術科学習指導案で作成する参考作品をつくる。」「生徒に説明する内容と板書計画を考えておく。」というように、やはり授業づくり、授業研究をしっかりと取り組むことが大切であるという意見が多いことは言うまでもありません。最後に授業研究の大切さを説いておられる二人の先生の言葉を紹介します。美術科の指導のあり方をまとめた『美術教育概論』の第3章、第2節の美術科の指導の実際の中で新関信也先生は以下のように著している。

学習指導案を書くということは、授業前に教師が授業の内容や特性を明らかにし、その指導方法と評価を明確にすることである。つまり、生徒の実態や学習活動での反応などを予想して、学習のねらいを定めるものである。様々な条件を考慮して、事前に授業を組み立てることが教師の重要な仕事となる。(中略) なお指導案の作成に当たり、授業を組み立てる上で土台や柱となる3つの観点がある。それは「①生徒観、②教材観、③指導観」であり、学習活動が成立する「生徒、教材、教師」の三要素に対応するものである。この3つの構成が有機的になったところで望ましい授業展開となる。」「何を目的として授業を行うのか」明確にする上でも、以上の観点はしっかりと押さえない、と著している。

教師はたえず目の前の生徒をよく観察し、生徒たちはどのようなことを考え日常生活を送っているのか、興味のあることは何なのか、どのような授業が生徒にとってわかりやすいのかを常に考え、授業研究を続けることが大切です。戦前、長野県の高校の国語教諭。戦後、1947年(昭和22年)新制中学校の発足と同時に中学校に転じ、東京都内諸地域の中学校に勤務した大村はま先生は著書の「教えるということ」の二つ目の章、教師の資格『研究することは「先生」の資格』のなかで次のように著している。

## 教えるということを理解するために

研究ということは、「伸びたい」という気持ちがたくさんあって、それに燃えないとできないことなんです。(中略) 力をつけたくて、希望に燃えている。その塊が子どもなんです。勉強するその苦しみと喜びのただ中に生きているのが子どもたちなんです。研究している先生はその子どもたちと同じ世界にいます。研究をせず、子どもと同じ世界にいない先生は、まず「先生」としては失格だと思います。精神修養なんかじゃとてもだめで、自分が研究し続けていかなければなりません。研究の苦しみと喜びを身をもって知り、味わっている人はいくつになっても青年であり、子どもの友であると思います。それを失ってしまったらもうだめです。(中略) 私はこれこそ教師の資格だと思うんです。

大村はま先生の言葉は説得力があると思います。授業研究、教材研究は時間がかかりますが、生徒たちは先生が頑張って研究して授業に臨んでいる姿をよく見えています。この言葉を学生たちに伝えるとともに大切に、新しい時代の美術科の授業研究に精進いたします。

1. 朝日新聞 令和5(2023)年11月6日(月)朝刊「教職敬遠なぜ」学生調査で浮かぶ理由
2. 美術資料 平成30(2018)年4月1日教師用資料 株式会社秀学社 P27
3. 奈良 正裕 平成29(2017)年5月30日「資質・能力」と学びのメカニズム 東洋館出版 P142-P143
4. 新関 信也 平成23(2011)年5月10日「美術教育概論」改訂版 日本文教出版 P157-P158
5. 大村 はま 平成26(2014)年4月20日 教えるということ 発行所 株式会社共文社 P21

